

西陣織

大塚小春

(2019 年度入学 鈴木ゼミ 3 期生)

京都には多数の伝統工芸品がある。中でも西陣織は、京都を代表するものといえるだろう。その美しさは世界にも誇ることができる。しかし現代では需要の減少や職人の減少が見られ、若者の中には西陣織をも知らない人がいるかもしれない。では西陣織とはどのようなものなのだろうか。そしてこれからも生き残るために何ができるのかを考えてみたい。



西陣織 1



西陣織 2

まず、生産地の西陣とはどのあたりを指すのか。はっきりとした決まりはないのだが、広くとらえると南は丸太町通、北は北大路通、東は烏丸通、西は西大路通に囲まれえた範囲を指すことができる。室町時代の応仁の乱で山名宗全の率いる西軍が陣地を構えていた場所であったことから「西陣」と呼ばれるようになった。西陣地域では西陣織関係の家が多く、歩けば機織りの音が聞こえてくることもある。

西陣織とは、西陣で生産される多品種少量生産が特徴の先染の紋織物である。先染とは蚕の繭から紡いだ絹糸を染色してから織機で織ることを言う。また西陣織には、綴・経錦（たてにしき）・緯錦（ぬきにしき）・緞子（どんす）・朱珍（しゅちん）・紹巴（しょうは）・風通（ふうつう）・もじり織・本しぼ織り・ピロード・絣織（かすりおり）・紬の 12 品種があり、それぞれ織り方や歴史が異なる。そしてこの 12 品種は昭和 51 年に国の伝統工芸品に指定された。

西陣織にはたくさんの工程があり分業によって成り立つ産業である。分業することでそれぞれの技術の向上や高技術の保持ができる。一方、どこかの工程が欠けると、西陣織を織りあげることができないので、各工程での職人の確保は西陣織の継承にとっても大切になってくる。ここで工程の詳細を少し紹介する。まず「図案」が行われ、織物のデザインが決まる。一番重要な工程ともいえる。次に「紋意匠図」という織物の設計図が作られる。その紋意匠図に基づき「紋彫り」といってたて糸の上げ下げの指令する穴をあける作業だが、最近はコンピューターグラフィックスにより作成されている。ここまでが企画と製紋工程で織物の基礎的な部分が決定する。織物の原料である糸にもいくつかの工程がある。その中でも「糸染

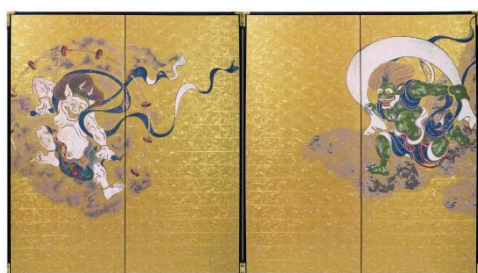


ため大舎人町の織物業は壊滅状態となった。乱後、職人たちは再び京都に集まり織物業が復活した。この頃から西軍の本陣跡の地域を西陣と呼ぶようになったことから、その辺りで生産されたものが西陣織として発展してきた。その後も朝廷から認められただけでなく、豊臣秀吉による保護を受けつつ、明の技術を取り入れるなどして更なる発展を遂げた。江戸時代後期には飢饉や二度の大火にあい、更に新たな絹織物産地の台頭などの苦境を乗り越えてきた。明治時代になると文明開化に伴い、西洋のジャガード織機などを取り入れ西陣織も近代化に成功した。そして大正、昭和、平成と時代を経て現在に至る。

現在どの伝統産業でも共通して言えるが、西陣織の職人数は減少、高齢化が進んでいる。それに伴い生産量も減少している。和装をすることが少なくなった現代では、その需要もかつてと比べて激減している。具体的に例を挙げると、帯地生産数量は2018年現在で15年前と比べると約3分の1にまで落ち込んでいる。また、職人の大半は60代以上となっており後継者問題が見受けられる。若手を採用するにも経営が厳しくできない所も多く存在する。職人としての収入だけでは生活できないといった問題もあるのだ。平成5年と平成28年を比較すると、組合員数は3分の1、総出荷額は14.5%にまで落ち込んでいる。こうした課題を乗り越え将来も西陣織を継承していくためには何ができるのだろうか。まず生産する側は、社会のニーズに対応したものを作っていくことが必要だろう。着物や帯、和装小物のイメージが強いが、ネクタイやポーチなどに加え、コロナ禍によりマスクも販売するようになった。更にネット販売を取り入れるなど様々な取り組みが行われている。また、西陣織で絵画を再現し、展示している場所もある。このように職人たちは様々な工夫をし伝統を現代でも活かしている。



西陣織マスク



西陣織による絵画の再現 1



西陣織による絵画の再現 2

では、私たちには何ができるか考えると、まず西陣織について知ることが第一歩になるだろう。主に若者は西陣織を認知していない人もいるかもしれない。そこで西陣織会館では実際に織物や織機を見ることができ、体験することが出来るので、その素晴らしさを広められるだろう。西陣織は高級絹織物のイメージが強く、商品を購入するには少々勇気が必要かもしれない。しかし、良いものを大切に扱えば長く使用できる。西陣織の技術を生かし、日常生活でも使いやすいものが最近は増えてきているので、たくさんの人に一度見てほしい。自分用ではなくプレゼントとしても良いだろう。これから先も時代を超えて伝統が継承されていくよう、今を生きる私たちが守り受け継いでいくことが大切である。

参考

[西陣織とは | 西陣織工業組合 \(nishijin.or.jp\)](http://nishijin.or.jp)

[「西陣織」とは | 伝えたい京都、知りたい京都。Kyoto love Kyoto](#)

[着物の未来を考える：西陣生産概況と産地生産数量の減少 | きものと宝飾社 | 呉服業界のマーケティング雑誌 \(status-marketing.com\)](#)

[西陣織美術工芸あさぎの技法 | 西陣織あさぎ美術館\(京都の美術工芸品\) \(asagi-museum.jp\)](http://asagi-museum.jp)

[西陣織とは？着物ファンが知っておきたい歴史と12種類の品種を徹底解説 | 着物・和・京都に関する情報ならきものと \(kimonoichiba.com\)](#)